

田島毓堂著

『正法眼蔵の国語学的研究』

鏡島元隆

道元禅師の代表的著述、『正法眼蔵』が和文をもってのされたということは、禅宗思想史上において真に画期的なことであるが、この和文のもつ意義については、従来必ずしも明らかにされなかつた。というのは、宗門には従来、『眼蔵』の言葉が分つても、『眼蔵』は会得できるものではないという考えが根強く存して、これを強調する余り言葉として理解する努力を怠る、あるいははばむ風潮が存したからである。

しかし、言葉として分つても『眼蔵』は会得できないということが真実であつても、言葉として分らなければ『眼蔵』は会得できない、ということも真実である。でなければ、どうして道元禅師が和語をもって『正法眼蔵』を著わされたかということが理解できなくなるからである。

『正法眼蔵の国語学的研究』（鏡島）

しかし、『正法眼蔵』をまず言葉として正しく理解するということは容易なことではない。それは鎌倉期の作品であるから、正確に理解するには専門の国語学者の力をまたなければならぬものがあるからである。

この点に著目して、『正法眼蔵』の国語学的研究に先鞭をつけた人に、故岡田希雄氏がある。同氏の「正法眼蔵の国語学的考察」（讚仰会編 道元禅師研究 昭和十六年二月）は、この方面における先駆的業績であるが、今回刊行された田島毓堂氏の「正法眼蔵の国語学的研究」は、この岡田氏の業績を受け継ぎ、さらにこれを大成したものである。本書は全篇八章、それぞれの小節に分れ、全文一三八〇頁に及ぶ大著であつて、同氏が名古屋大学に提出した学位請求論文である。

本書の第一章、言語による表現——理解の

行為について——正法眼蔵の言語研究のために——は、著者が国語学の立場から『正法眼蔵』研究をめざす立脚地を弁証したもので、著者は『正法眼蔵』を国語学の立場から研究することは、『眼蔵』の内容の理解を助け、その理解を正しくすることができ、かつ、歴史上の一著述である『正法眼蔵』を国語史の資料として役立てることができると結論している。

本書の第二章、資料について——乾坤院本正法眼蔵について——は、著者が底本とした乾坤院本『正法眼蔵』についての著者の書誌学的考察である。著者が乾坤院本を底本に採んだのは、岩波文庫本『正法眼蔵』は底本としている本山版『正法眼蔵』における改変をそのまま受けついでいるからであり、大久保道舟氏の道元禅師全集（上巻）は校訂に遺憾な点があり、さらに巻によって底本を異にするという措置がとられていて、いまだ一つとして一底本による古写本の完全な姿での刊行がなく、まして国語資料として信頼できる校本など見られないという理由に基づくのである。

このような立場から、著者はテキストとして乾坤院本『正法眼蔵』を選んだのであるが、

乾坤院本を選定した理由は、一つにはそれが道元禅師自身の編になる七十五巻本のテキストであることと、一つには現在知られ得る最古の完本であることによる。しかし、最古の完本であることが最良のテキストであるとは限らない。著者が底本に乾坤院を選んだことは、本書のもっともすぐれた特質であるが、問題もそこに存するであろう。これがため、著者は本章で、七十五巻本『正法眼蔵』における乾坤院本の位置およびその書誌等について詳しく考察している。

第三章、表記法は乾坤院本の表記法の詳細について記し、第四章、音韻は同じく音韻の問題をとり扱い、第五章、語法は各品詞ごとに詳しくその用法その他の問題について考察したものである。第六章、語彙は語彙全体について数量的な扱いをし、基本的語彙を指摘するとともに、他作品と比較を試み、『正法眼蔵』の語彙およびその構成について概観している。第七章、文論では文論を扱い、人名表記と待遇の関係を考察し、第八章、漢語では『正法眼蔵』における大きな問題である字音語使用について、各種の問題を指摘し、それについての見通しを与え、実例とともにその使用法について分類整理し、その特徴的方

法を明らかにしている。

右によって明らかであるように、本書は純国語学的立場よりなされた『正法眼蔵』の国語学的研究である。本書に序文を寄せた松村博士がその序で、「記述は個別的に精細を極めるが、問題の扱ひ方がともすれば徹視的に過ぎる」と記しておられるように、これを宗学研究の上にとの役に役立てるかには、なかなかむずかしい点があるが、ともかく、年少気鋭の宗門の学者によってこのような大著がものされたことは新進学者を鼓舞させるものであり、真に喜ばしいことである。著者はさらに、『正法眼蔵』の諸本を蒐集し、これを整理対照して校本の作製に邁進しているとのことであるからその完成の日の一日も速かならんことを待望する。

（本文一三〇二頁、図版一七頁、目次・凡例二四頁、索引七六頁、笠間書院 昭和五二年三月三十一日刊、二五〇〇〇円）